村人⇔魔物な日々

御紋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
村人⇔魔物な日々

【Ｎコード】
Ｎ７８０５Ｘ

【作者名】
御紋

【あらすじ】
じゃんけんで先攻後攻を決め、四択あるいは三択で攻撃防御の選択をするＲＰＧ．そんなゲームの主催王国の中階級域の村人、ドン家の長女が勇者さまたちをお世話する話。お世話＝戦闘相手。『村長、あたし最上階級域の村人になりたい』。久しぶりにしたゲームの裏側がこんなんだったら面白いんだがと言う作者の突発的捏造話。長女の最大の敵は赤青緑のどの勇者さまだ？

1　勇者さまが来た

攻撃、防御、カウンター、降参。

世の中には実に４択というバランスに優れたものが存在しまして。
それはそれはとても優れた生存共栄のための技でありまして。
とてもとても大事なものなのです。
（特に最後の４番目とかが）

しかし、ご存じか。

この世界の大多数である我らには３／４択肢しか赦されていないのです。

超理不尽。

◆◆◆

号令がかかっていた。
それに合わせて、がやがやと村の大広場に集まったのはへんてつもない村人たち多数＋王道の村長一名。

「なんだなんだ？」
「今日は畑の大豆を蒔こうと思ってたのに」
「うちは、今日は染色の日干しに力入れるつもりだったんだがねえ」

真っ当な農業人・職業人のお言葉です。素敵。
そのようなへんてつもない村人＝生業に励む真っ当な村人が首を傾げる今日の村集会。
我がイイソン村の堂々たる村長が、そのつるつるお肌の頭皮を日向に曝して、細った歯並びを隠すために伸ばした真っ白なお髭を伸ばし、曲った腰を無理に伸ばしつつ、村の大広場に設置したお立ち台へ立ちあがった。

「皆の衆、よくぞ集まってくれた」

好々爺の顔した酷いお人は、震える加齢の習性をものともせずに一声を発した。
拡声器もないのに、よくぞそこまで通る声を出せたものである。
ふごふごと第二声が発する前の空気の出入りする気配までもが感じられる。実に、臨場感ある長のお達しであった。

「突然じゃが、今日からこの村はモンスターに支配された」

「「「「「　ええええええええええええええええええ？？？？？　」」」」」

本日。

王国歴一〇〇四六九年三月〇一日。

王国の全ての村が「モンスターに支配された」。

◆◆◆

高齢である。
…間違えた、恒例であるイイソン村『今回のお世話人はだ～れだ★』じゃんけん大会が実行された。
司会はもちろん、酷過ぎる村長である。
あの髭を一度はむしってやりたい思いに駆られるイイソン村の村人は実は多い。

『じゃんけんっ、』

『ポン！』

「やったあああ！！」
「ああああああ、しまった勝っちまった！！」

苦悩のチョキと歓喜のパー。
そんな光景があちらこちらで行われている。
ちなみにグリコのグーは、頭上あるいは地面にむかって伸びあがっている。前者は敗者、後者は勝者。しかし、かれらの心情でいうのであればその勝敗は逆転していたりもする。

「よしよし、では第四回戦じゃ。負けたものは広場の外周に廻るようにな」

もちろん、勝ち続けているものは中央じゃぞ。

既に負け抜けした幸運な村人たちは、気楽な表情でその純粋な喜劇を楽しんで眺めている。

すでに彼等にとっての苦悩の種は王水に溶け落ちたように存在しないからこその、傍観者兼観客者兼立会人の状態である。

中央に残る参戦者の心理状態はと言えば『 逃げられません、負けるまでは 』。

まさにそれである。

「ううう、いやだ負けたい」

「うわあ、俺、前回したんだから今回は見逃してくれてもいいじゃないっすか」

「……次は負ける次は負ける。おい、俺は次はパーを出す。いいか、パーだぞパーだ」

「誰が騙されると思ってるんですか、じゃあ私はチョキを出しますよ」

「……本当？」

「さあ？」

中央の負けたい参戦者たちの表情はまさに喜劇。

下手に駆け引きをしようとして更に苦悩している輩もいるあたりが、外周の観客者＋司会には喜劇と思われるところであろう。酷い。

そして、続いた第五回戦、第六回戦。———そして、最終対決ともいえる第八回戦。

司会の村長が動いた。

「今回のイイソン村の勇者さまお世話人は、ドコん家の長女に決定

じゃ」

見応えのある最終決戦を見つめ続けたイイソン村の全村人はそれは盛大な拍手を送った。

「――――　勇者なんか大嫌いよおおお！！」

ぷるぷる震える皺だらけの老人の手にがっしり掴まれた少女は叫んだ。

一〇三回引き分け一勝を以て前回の覇者を制した新チャンピオン、ドコん家の長女は、やはり恒例となりつつある『今回の（勇者たちの）お世話人はだ～れだ★』じゃんけん大会の歴代覇者たちの必須宣言『勇者なんか大嫌いだ』を発したのである。

◆◆◆

さて。

今回の勇者さまは三人らしい。
四人のときと三人のときがあるのはどういう違いによるものかはよく知らない。

『そろそろ、そっち方面に青の勇者さまが向かったらしいわよお』
「ふむ、そうか。わかったぞい、情報ありがとうのう」
『いえいえ、こちらもいい仕事させてもらってるもの～』
無事に防衛出来たら、強奪品、高値で買わせてもらうからよろしくね～★

ぷちん。
と、村長と色気満載のアイテム屋の通信魔法が途切れる音がした。

「ということで、準備はよいかな？　長女くん」
「酷い」

全村長と王族、あるいは魔法屋、アイテム屋、武器屋の店長だけが使えるという勇者にも教えてない通信魔法（丸秘）によって、ドコん家の長女の必死に頑張る日が決定した。（といっても、基本的には受け身にしかなれないのであるが）

イイソン村の配置は王国各村の村階級では『中階級域の下』。
よって、彼女はそこそこ強くて、そこそこ弱いモンスターにならなければいけないのである。

「せめて、イイネ村とかヨイカ村の村人になりたい」
そうしたら、もっとましな選択ができるのに。

長女はしくしく泣いている。

イイネ村は上階級域の下、ヨイカ村は中階級域の上の地域の村である。
彼等の四択には、時折ランダムに選択前に特技を使用することが出来るのである。
最上級域のヨッキタ村に至っては、武器屋とアイテム屋が秘匿されたいわゆる隠しコマになっているため、勇者様たちは現地で右往左往しなくてはその存在に気づくことはない。気づいていても村の周囲に広がる毒地と周囲を徘徊する雑魚モンスターという名前の教育された飼いモンスターや飼い精霊たちがあり得ないほどにステータスが高値のため、村に辿り着くのは至難の業。
なによりも勇者さま方がその勇者の試練とやらを終了される直前まで出番がほとんどないことから、中階級域以下の村々からは羨みの視線が贈られているのが、最上階級域の村という存在である。

「最上階級域の村人になるには、ATとDF，MG，SP，HPを増やさねばなあ」
ああ、精霊マスター資格か、モンスター飼育マスター資格、治療師上級レベルを獲得しないとあそこの村人にはなれんぞ？　ああ、それと農業レベルマックスまであげんとな。

「……なんてチートなの、『ヨッキタ村村人』」
知ってたけど。

モンスター飼育レベル中級、治療師レベル初級の長女は地に伏した。

◆◆◆

「うううう、痛かったよおお」
「お疲れー」
「お疲れさん、世話人どのー」

先日、隣村でこの地域で初の勇者さまが確認された。
青が優勢だということで、じゃあきっとわたしの初戦闘相手は青の勇者さまなのね。とか思っていたら、突如二つ隣の初階級の上地域にいた赤の勇者さまがイイソン村を来襲。
初回のモンスター指定は『ラミア』で変身魔法具を使っての対決でした。
世話人決定の頃から、彼女は毎日『ラミア』の格好でいなくてはいけないきまりであったので、そろそろ畑の仕事を放置しておけなかった彼女にはある意味丁度よく、ある意味驚きの初対戦でもあった。

「叩いても叩いても、赤の勇者さま死なないし〜。そしてやっぱりひどい、あの四択」
もう少しでヤれるってところで必ず降参しちゃうんだもん。こっちは出来ないのに。

初回ならではで長引いた初戦は、なんとか長女が扮する『ラミア』

が勝った。ＨＰ１２（赤棒）で。
降参した赤の勇者さまはしばらくこの村でご休憩されたあと、再び旅に出立された。（いい度胸だ）
我が家の飼いモンスターである『赤ごぶ』くん（ただいま、イイソン村周囲を巡回中）にやられてしまえと思った彼女は、そのときけっこう心がやさぐれていた。
しかし、敵は諦めなかった。
どんな強運をもっているのか、彼女が扮する『ラミア』のＨＰが全快する前に再び赤の勇者さまは来襲されたのである。（ふざけんなと彼女は思った）
『そーれ、ちくちく』と半分ほどのＨＰに回復していた彼女とＨＰ全回復していた赤の勇者さまが戦闘中、呼んでないのにやってきたのが噂の青の勇者さまだ。
とってもいい笑顔の青の勇者さまはこの地域の武器屋最高レベルの武器防具を携えて、笑顔で赤の勇者さまをヤッた。（超いい笑顔だった怖い）
そして、天使のらっぱの鳴り響く音を聞きつつ、こちらを振り向いた青の勇者さまはやっぱりいい笑顔で『ラミア』をヤッた。怖い。
心も体もぼろぼろで、ＨＰ０の表示とともに『ラミア』は転送された。
村の上級治療師と僧侶の待つ村人用教会へ。

「青の勇者、怖い」

『ラミア』の変身魔法具を外し、村人ＨＰ『―（存在しない）』になったドコん家の長女はがくぶるしつつ、呟いた。
しかし、彼女もこの王国の誇る村人である。
王国歴まさに一〇〇四六九年は伊達ではないのだ。これくらいで

めたぼこになる脆弱性は持ち合わせてはいない。
青の勇者さまの持ち村になった今、彼女は村人の一人として村の利益を上げなくてはいけない。
そして、次回青の勇者さまがこの村に顕れたときにはそれを献上しなくてはいけないのだ。

青の勇者さまの来訪時はいつもは酷いイイソン村の村長が全てしてくれることになっているので、彼女の仕事はこれにていったん終了である。（ありがとう村長）
きっと好々爺の顔であの村長は村の利益を献上しつつ、『ところで、この村のレベルをあげるために投資をしてはいただけませんか』などと提案していく筈である。
そのへんは、あの酷い村長の力量をＭＡＸで信じている。
あの怖い青の勇者さまならきっと稼ぎは多いだろうし、投資してくれるはずだ。むしろ、投資してほしい。
ついでに投資レベルが上がったあとに、誰か不幸の種を蒔くとか村レベルを下げるとかの強制命令を出してくれるともっと嬉しい。
（だって、そしたら差額分が村にある程度戻ってくるんだ。ちなみに１／２程度の額）
なかなか滅多にないんだけどね、そんなこと。ちえ。

「とにかく、畑の草むしりと水やりをしよう」
久しぶりに自分の姿に戻れたドコん家の長女は、いい笑顔で仕事へ向かった。
目指せ、農業レベルまっくす。

2．今度は『ドレッドゴブリン』だ

「酷い」

無事に青の勇者さまの持ち村になったイイソン村。

今回の勇者さまのお世話人（＝戦闘相手）であったドコん家の長女は、ただの村人として畑に水を撒き、弟妹の子守りをし、たまに村へ餌をねだりに返ってくる我が家の可愛い飼いモンスターを愛でる。

心から、『これでもう全部終わればいいのに』とか長女が半分現実逃避をしていたその時、村中に通信魔法（拡大通信）が流された。

《イイソン村がモンスターに支配された》

「酷い！」

「さあ、出番じゃ。次はこれじゃああ！！」

目の前に異様にきらきらした目で今回の変身魔法具『ドレッドゴブリン』を差し出したのが、イイソン村の村長だった。

村長、嬉しそうなのはなんでよ。（涙）

◆◆◆

実は、ドレッドゴブリンはうちの飼いモンスターにいたりする。
隣の家の少年（いまは青年）が拾ったはいいけど、もう飼えないよと母親に怒られて泣いていたので、ウチの子にしたのが最初である。
我が家の大黒柱である父親がまだ幼い長女へ『よし、おまえの初めての飼いモンスターはこいつだ。いい子に育てろよ！』と赤ら顔で言ったのがきっかけだ。
幼かった長女は『自分はどんな飼いモンスターがもらえるのかな。わくわくわくわく』と夢を見ていたりしたのだが、残念なことに親父はその夢を無造作に破壊した。
別にそんな高いレアモンスターとか期待したわけじゃないけどさ、せめて可愛くラッピングとかお父さんが良い子を探したんだよとかそんな何か素敵エピソードがあってもいいじゃないか。
泣いてる少年の手から拾い上げた土で汚れたままのドレッドゴブリンを、家の裏手で野菜を洗ってた長女を呼びつけ、そのまま『おまえの初めての飼いモンスターはこいつだ』とかやられたらさあ。

「ふ……ふえええええええ」

って泣くだろう？と思う。

でも、なんだかんだいって初めて自分の手で育てた子だから、可愛いんだよ。『赤ごぶ』ちゃん。

「しかし、まさか自分がこの格好をすることになろうとは」

ごめん恥ずかしいわ。

ゴブリンというのは通常小鬼の種族を指すのだが、どの小鬼もお面を装備しているのがこの王国の特徴だ。

マスカレード風味のそのお面は、常々戦闘では前が見えなくて邪魔なんじゃないのかなとか思っていたのだが意外によく見える。これは初めて知ったこと。

問題はいつも槍をもってないと駄目なのよね、ちょっと邪魔だわ。

でも、ラミアのときと違って二足歩行が可能なので畑の世話を同時にできる辺りが今回の『お世話人』のいいところだ。ちょっと、白タイツがとっても辛いけど。とっても辛いけど！

ということで、先代のお世話人経験者たちの心温まる対処法の一つを実施した。

「これは『ドレッドゴブリン』の姿であって、私の姿じゃないのよ！　そう、白タイツなのは私じゃなくて『ドレッドゴブリン』なの！！！」

叫ぶ彼女の眼は涙目である。

今度ばかりは、彼女は速くどの勇者さまでもいいから来てくれないかなとか思っているようだった。

だって、自分をごまかすにも限界はある。

そして彼女は、今日も支配しているイイソン村で槍を鍬にかえて畑を耕していた。

（早く来て、勇者さま！）

◆◆◆

「え？　ガチで？」

『ええ、そうです。つい先ほどまで上級域へ向かっていた青の勇者さまがいきなり方向転換をなさいました』

「ふむ。――――まさか、この村に戻るつもりかの―？」

『わかりませんが、明示されている彼の荷物を見る限り、カエロッカナは持っていらっしゃらないようですし。……おそらく、今頃アイテム屋か青宝箱を目指しているところではないでしょうか？』
「バイン狙いか」
「……」
『……お世話人さん、頑張ってくださいね？』

本日、魔法屋さんのご主人とお話をした。
とても、とても、心が、…心が。
……やっぱりくんな、青の勇者あああああ。（泣）

青の勇者の動向を計った日、長女扮する『ドレッドゴブリン』の黒の仮面はなぜか濡れていました。

魔法屋さんがこちらを見る眼が同情に満ちあふれてたなんて知りたくもない！

◆◆◆

青の勇者さまが来た。

例の魔法屋さんとお話をした日以来、毎日王国情報紙『今日の勇者さま』を購読し続けた私は知っている。

この男はなんと青宝箱でまさかの5バインをゲットした翌日、即行でこの村へ来襲したのである。

それまで、なかなかアイテム屋に行けなくて苦労してたくせにね！！（泣）

長女は心からガクブルってなものだが、そこは万年王国の誇りある村人兼いまお世話人としてそんな姿はみせられないのですよ！

ということで、本日のイイソン村支配モンスター『ドレッドゴブリン』、参る！

「……逝っとけ？」

ということで、即行で逝かされました。

はいはい、事態の過程を紹介しろと？

『ドレッドゴブリン』先攻、青の勇者さま後攻。

青の勇者さま防御、『ドレッドゴブリン』特技使用、力をためて攻撃力をアップした。

青の勇者さま攻撃、『ドレッドゴブリン』カウンター使用失敗。HP0.

……なにか問題が？

だって、だって！　青の勇者さまの眼が怖かったんだ！

前回はそれこそ「炭酸飲料のごとき爽やかさ」とでも間違ったタグを打ちたくなるような、そんな超いい笑顔で『ラミア』をヤったくせに！

今回はもう相対したときから、もう視線がブリザード！

飼い精霊の魔法ゲットしちゃったのって言いたくなる視線の冷たさだ。

しかもあの勇者さま、しっかりとレベル上げしちゃっててあれ上級地域の飼いモンスター余裕でやれるでしょ、あのステータス。

なんで、青の勇者さまだけあそこまで高ステータスなのか。

緑の勇者さまなんて、いまだに初級地域のところの村で一生懸命お金貯めてるし。（死亡回数６回）

赤の勇者さまは、いまようやく、中級地域の武器屋で武器防具買ったところだし！　（死亡回数２回）

どうして、青の勇者さまだけまだ死亡してないのかと不思議でならない。（死亡回数０回）

このままいくと確実に魔王がくるぞ。デビラーマンはすぐそこだ！

あのような高ステータス、こっちの攻撃力じゃ半分くらいしか削

れないよ、あっちのＨＰ．
とにかく、青の勇者さまにはもうこの村に戦闘には来てほしくない。
本気で。

「青の勇者さま、早くクリアしてくんないかな」

ぼそりと呟いた、村人用教会で。
もう、ゲームなんてどうでもいい。でも、王様はする気満々なんですね、知ってます。

――――――ああ、本当にどうしてあのとき負けなかったんだろうあたし。

今日も涙するドコん家の長女であった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7805x/

村人⇔魔物な日々

2011年10月21日04時03分発行